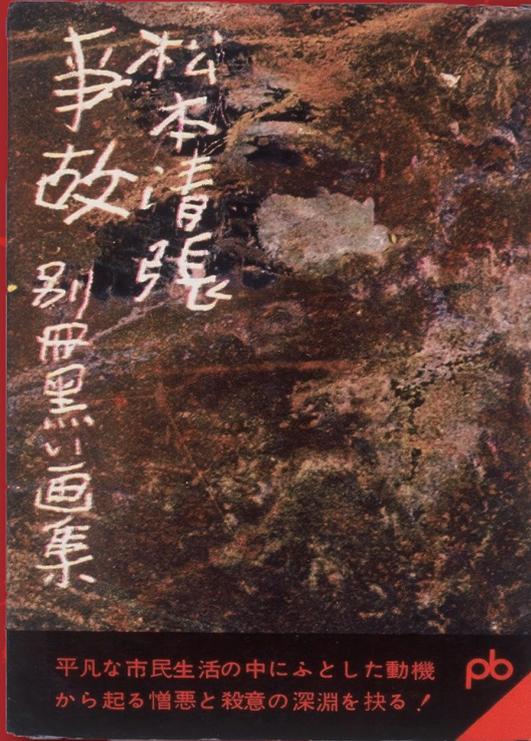


松本清張記念館

◆館報◆

2022.8
第69号

『事故』 昭和38（1963）年 文藝春秋新社

『事故』は連作「別冊黒い画集」の第1話として「週刊文春」で昭和37（1962）年12月31日号から昭和38（1963）年4月15日号まで連載された。

現在入手しやすい本

『事故 別冊黒い画集(1)』文春文庫、松本清張全集 7巻

高田は、会社に戻りかけたが、途中で、ちょっと気にかかることを一つ思い出した。

それは、今朝、あの家に駆けつけたとき、奥さんは、主人は出勤したあとです、とはつきり云った。しかし、主人は出張で昨夜は帰宅していない。

作品介绍

二月十一日深夜、杉並区在住の会社役員・山西省三宅に山宮健次の運転する深夜運送のトラックが突っ込み、門から玄関を破壊した。山宮の勤める協成貨物株式会社では車輛係の高田がさっそく事故処理にあたるが、若く美しい山西の妻・勝子は意外にも「事故は仕方がありませんから、あまり運転手さんを責めないで下さい」と言う。破格に安い補償で折り合いをつけた高田は自らの手腕に満足していた。

五日後の二月十六日早朝、山梨県北巨摩郡の断崖下で山宮の死体が発見される。山宮は現場に復帰し、荷物運搬のため松本に向かう途中だった。

翌十七日午後、山梨県千代田湖畔の竹藪から、東京の興信所員・浜口久子の絞殺体が見つかる。久子は建設会社役員・素行調査を行っていた。所長の田中が警察へ提出した久子の「調査報告」ではなぜか対象の行動の一部が改竄されていた。

同じ山梨県内で前後して起きた二つの殺人事件は捜査が進展せず、ひと月余りの捜査本部は解散する。迷宮入りかと思われたが、事件は「安すぎた賠償金」をきっかけに動きだす。

作品後半では、倒叙ミステリの手法がとられ、一見無関係な二つの事件が、犯人の心理描写とともに結びついていく。

鮮やかな構成と「安すぎた賠償金」という意外な謎により数度にわたりテレビドラマ化されてきた。

今回の企画展「遺された指紋——松本清張と台湾ミステリー小説——」では、二〇一七年に台湾で出版された翻訳版『事故』（中国語・繁体字）も展示している。

（学芸員 中西由紀子）

目次

松本清張研究	2
第43回オンライン研究発表会	2
松本清張記念館企画展	2
遺された指紋——松本清張と台湾ミステリー小説	5
関連イベント	6
友の会活動報告	7
トピックス	8

松本清張研究会 第43回研究発表会(オンライン)

令和4年6月4日(土)午後2時~4時半 参加者:62名

講演 『推理小説におけるリアリティとは』
講演者:中丸宣明(法政大学文学部日本文学専攻教授)

松本清張の、とくに新聞や雑誌で一年とかの長期連載で書いた推理小説には、推理小説として不自然なところがあるわけです。今日は、その不自然なところを考えてみたいと思います。しかし、それは何も欠点をあげつらうという意味ではありません。基本的に帰って推理小説がリアリティを持つとはどういうことか、また逆に不自然さが起こってくるとしたら、その理由はどのようなものかを考えてみたいと思います。

代表作「砂の器」にも不自然なところがあります。

まず「今西刑事の間抜けさ」。山本健吉が一九六一年に批判しています。「故郷の岡山を出て東京に来るまでの、被害者の足取りの調査を、五か月もたつてからやり直すのはおかしい」、あるいは「列車の窓から紙吹雪を散らしたのはたして成瀬リエ子であったか、秋田県の亀田へ行った「妙な男」はほんとうに宮田であったか、これらは面通しなり顔写真なりで、目撃者に確かめるべきなのに今西はしようとしなない」(あかせぬ推理の糸、超短波の殺人)を追う刑事「読売新聞」一九六一・七・九」と言っています。

次に「血染めのシャツ」。これは加納重文という人の指摘です。「血染めのシャツよりさらに処置のしにくいと思われる、上着やズボン、血染めの姿を隠したレインコート(小説は、成瀬リエ子が劇団の衣装部屋から持って来させた)と書いている)などは、どのように消滅させたのか、「血染めのシャツ」にそれほどこだわらるなら、それらの記述にまったく関心がないというのも、不自然にすぎない」(清張文学の世界 砂漠の海)二〇〇八・五と。また、私の見聞から言って、中央線を歩いてそれを拾い集めるなんてとてもじゃないけどできません。

次に「方言」の問題。殺された三木謙一という人は、「岡山県江見町に生い立ち、昭和三年から十年と十か月、島根 県警に奉職、その間昭和八年からの三年間、亀高駐在所勤務」、そういうことになっています。そして、「昭和



日本三大奇書

小栗虫太郎『黒死館殺人事件』1934年4月号 - 12月「新」
夢野久作『ドラッグ・マゾラ』1935年1月、書き下ろし
中井英夫『虚無への供物』1964年2月、

作品名	著者	発表年	掲載誌	巻数
黒死館殺人事件	小栗虫太郎	1934	新小説	3
ドラッグ・マゾラ	夢野久作	1935	新小説	2
虚無への供物	中井英夫	1964	新小説	1
その他				

選別文庫編輯部刊『新選文庫』1990年10月発行
27年ぶりに集計された現代ベストミスター、上位10作品とは――

十二年には依願退職して郷里に帰り、二十二、三年前から雑貨商を営んでい

る」という設定です。そうすると、方言を身につけるに遅い年齢で、成人になってから行った出雲地方での三年間の亀高勤務だけでは、方言が身につくはずがない。しかも離れて二十四年、三木が未だに出雲の訛りを使っていたのは不自然だと思えます。

こういう不備な点は確かにあります。いわば濫作のなかでの瑕疵とでもいえるべきものでしょう。しかし、次に見るような不自然さには別の意味があるように思えます。

例えば、「超音波殺人」というのがあります。これは荒唐無稽で、推理小説の殺人手段とはとても思えないと言われそうですが、必ずしもそうじゃない。読売新聞の連載当時の担当者、山村亀二郎の弁で、「当時科学の先端をゆく超音波。(中略)その実際については東工大の時実教授(実際には実吉純一)から御教えを受けた。」(「砂の器」のころの清張さん)「松本清張全集第五巻月報」一九七一・九」と取材先を明かしています。その東京工業大学の教授、実吉さんの実際に書いた論文を見てみると、「第二次世界大戦までは人目につかない方面が主になってきたが、近年は魚群探知、金属の探傷、機械加工など各方面に注目を引くようになってきた」(「超音波応用技術の現況」『電気学会雑誌』八月)と書かれています。一九五五年、昭和三十年の記事です。ここでポイントになるのは「第二次世界大戦までは」という言葉です。戦況が不利になってきたときに、日本軍が秘密兵器を開発しようとする。その中で、超音波兵器はかなりまじめに考えられていた。「砂の器」執筆の時代はまだ戦争の影がある時代で、こういうのがけつこうリアリティを持つていたはずだと思うのですよ。

もう一つは「関川重雄の犯罪」。和賀英良の友だち関川重雄が和賀とは無関係に人を殺すわけです。これは明らかに、犯人はこいつじゃないかと読者を誤誘導する、推理小説の王道トリックです。しかし推理小説の一般的な形だとこれをこのままにはしておきません。何らかの形で罪を問います。でも、この「砂の器」ではほったらかし。関川の犯罪は宙に浮いた形になるわけです。では、なぜ和賀英良の友だち、関川に殺人をさせたのか。和賀たちのヌーボーグループが「若い日本の会」という、当時非常に強い影響力を持っていた集団をモデルにしていることと関係していると思われる。清張の目から見れば、前衛的で急進的だとみなされていたグループの思想が、和賀英良の犯罪の中に隠されているという批判があったのでしよう。そして、そういうエリート集団に対極的なものとして、泥臭く、純朴で、まじめな一般庶民の代表として、今西刑事を意図的に置くわけです。

それからもう一つ、「和賀英良の実家の描写」があります。今西刑事が和賀の実家を訪ねるところです。「誰かいるかね」今西はその男の子に聞いた。その子は黙って目を上げたが、その片方の目はまっ白だった。残っている目も瞳が小さかった。今西はそれを見た瞬間、どきりとした。「誰かいないかね」今西は大きな声を出すと、奥の方から物音がした。子供は黙って今西を見上げていた。その不気味な片目が彼に一種の嫌悪感を起こさせた。子供だと思っても、すぐには可哀そうな気が起こらなかった。その子の真っ白い血色を見てみると、病的な感じが強かった。「この描写は、本筋に何の影響もないし、推理の手助けになるわけでもなく、つまり、ある種の差別的なイメージみたいなものを作り上げていくのです。そして、それはもちろんハンセン病の問題に繋がってくるのです。もちろん清張はハンセン病に対する差別については明確に反対している、和賀英良の抱え込んでいる暗い部分を単に個人の問題ではなくて、社会のハンセン病差別に対する告発として、おそらく描き出そうとしているのだらうと思えます。そういうところ

がまさしく社会派推理小説なのだと思います。

「超音波殺人」以下の不自然さは、確かに今我々には見えにくくなっているけれども、当時は確実に意味を持っていた、そういう物語性やストーリーをもつて、小説にリアリティを与えているのだと思います。

ここで「日本三大奇書」というものに目を転じて、推理小説におけるリアリティとは何かということを考えてみたいと思います。「日本三大奇書」とは、小栗虫太郎の「黒死館殺人事件」（一九三四年）、夢野久作の「ドグラ・マグラ」（一九三五年）、それから中井英夫の「虚無への供物」（一九六四年）ということになっているようです。三つとも大傑作だと思います。

今回おもにとりあげるの「虚無への供物」ですが、その一番新しい版（講談社文庫）には、それまでに書かれた全部の「まえがき・あとがき」が集成されています。「最初の前書き」の中で、「虚無への供物」は「アンチミステリー、反推理小説だ」と書かれています。この作品は確かに反推理小説です。ただここで「アンチミステリー」というのは、今の言葉でいうならば、「メタミステリー」、「ミステリーを批評するミステリー」、「ミステリーというものを分析するミステリー」、「ミステリーのミステリー」などと言ってもいいかもしれません。

「虚無への供物」には、昭和二十九年の洞爺丸の沈没事故で両親を失った蒼司、紅司兄弟、徒弟の藍司らのいる氷沼家におこる密室殺人が描かれます。そこに、素人探偵みたくのたくさん出てきて、推理の当てっこゲームを始めます。この事件はポーのこういうものには当てはまるんだとか、シャーロック・ホームズはこういうときこうしたとか、ポワロはどうしたとか、たくさん書かれています。直接具体的な探偵や作品名が書かれていないところでも、え、これ、どこかで読んだよなあと思わせるところが多くあり、ありとあらゆる推理小説の良い所取りをしているような印象を与えます。そして、それらを微妙に組み合わせ批判しあう、そういう「メタミステリー」的構造の小説なわけです。

洞爺丸事件ということからして、水上勉の「飢餓海峡」を当然踏まえているし、あきらかに清張を踏まえているところもあります。第二次世界大戦を一つのブラックボックスにして、そこに入入りすることによって人が変わる、入れ替わる、状況が変わるといようなことを書

いている。「ゼロの焦点」なんかそうですね。夢野久作的な殺人方法も使われています。「黒死館殺人事件」からは、不思議な家が舞台になり、家がトリックの根源となるような設定が取られていて、氷沼家という目白にある大豪邸が出てきます。そういう意味で、この小説は引用の織物みたいなものになっているのです。

一九六四年の「講談社版あとがき」では、塔晶夫（中井英夫）が「十年前の洞爺丸沈没事故は確かにそのとおりで、そこには別の次元の入口が黒々と口をあけていた。私はたちまち、その異様な色彩幻覚の世界へ誘い込まれていた」と書いて、この小説に記したのは「その世界の滞在記録で、すべて事実には違いない」と言うのです。しかし「見たところ、さながら反宇宙界の出来事のように、何もかも裏返しにされた奇妙な凹凸を示している」というわけです。

「虚無への供物」とはどういう小説なのかというと、例えば、「ドグラ・マグラ」の世界は精神病院にほとんど限られているし、「黒死館殺人事件」はまったく非現実的な屋敷が舞台になっています。ところが、この「虚無への供物」は確かにそういう屋敷も使い、閉ざされた空間なのだけでも、昭和三十年代の現実が裸の形で出てきます。三河島や鶴見の国鉄惨事とか、トニー谷がどうのこうのとか、どんな映画が流行ったとか、どんなシャンソンが歌われていたとか、現実がもろに入っています。だから、現実とは切れてはいない反世界なのです。

最後に、連続殺人事件の犯人が、「物見高い御見物衆」にこう言っています。

「この一九五五年、そしてたぶん、これから先もだろうが、無責任な好奇心が創り出すお楽しみだけは君たちのものさ。何か面白いことはないかなあとキョロキョロしていれば、それにふさわしい突飛で残酷な事件が、いくらかでも現実にもまれてくる。いまはそんな時代だが、その中で自分さえ安全地帯にいて、見物の側に廻ることが出来たら、どんな痛ましい光景でも喜んで眺めようという、それがお化けの正体なんだ。おれには、何という凄まじい虚無だろうとしか思えない」云々と。つまりこれは、本格派推理小説とかミステリーを楽しんでる裏には現実があるぞ、と言っているわけです。

ただこの「虚無への供物」がさっき言ったように単なる反ミステリー、反推理小説ではないというのは、たぶん中井英夫の分身だと思われるアリオシーヤに奈々が

伝える次のような探偵小説観があるからだと思います。

「むろん探偵小説よ。それも、本格推理長編の型どおりの手順を踏んでいって、最後だけがちよっぴり違う——作中人物の、誰でもいいけど、一人がいきなり、くるっとふり返って、ページの外の「読者」に向って、あなたか犯人だ」って指さす、そんな小説にしたいの。ええ、さつきもいったように、真犯人はあたしたち御見物衆には違いないけど、それは「読者」も同じでしょう。この一九五四年から五五年にかけて、責任ある大人だった日本人なら全部犯人の資格がある筈だから」。

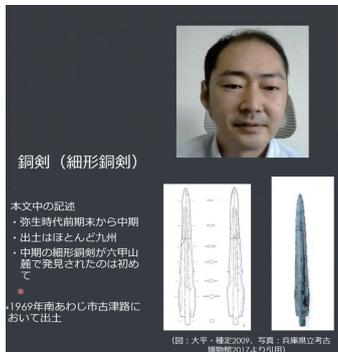
これは、推理小説そのものを否定しているわけではなく、つまり、現実をとらえた、「おまえが犯人だ」と読者を指さすような、そういう推理小説を夢見ていると言っているわけです。そういう推理小説は、具体的にいうと「ミステリーのミステリー」という形で書かざるを得ないだろう。だから、「虚無への供物」は、現実の悲劇、現実の事件とか事故を取り上げて、それをミステリーに仕組むことの不可能さみたいなことを言いながらも、ミステリーを書くとはどんな意味があるのかと問いかけているのだらうと思います。

ここで清張に戻ると、「砂の器」の、和賀英良の実家の描写にある差別的イメージや、和賀の友人の関川重雄の犯罪に描かれているのは、ハンセン病の問題をタブーとして葬ってきた日本の社会に対する一つのアンチテーゼであり、若いヌーボー・グループを批判的に描いたことは、戦後のアプレゲールの時代のあり方に対するアンチテーゼとしての社会性です。「砂の器」がそういう社会性を持ち、現実社会の問題を扱えば扱うほど、つまり社会派推理小説であろうとすればするほど、必然的に純粹な推理小説としての枠を踏み外さざるを得なくなると思えるのです。そこに「砂の器」の一面の不自然さは出てくるのだと思います。

〔付記〕本講演の記録は、当日の講演の録音をもとに事務局にまとめていただいたものである。当日の場の雰囲気ないし講演そのものの同時性を尊重して、あえて最小限の加筆にとどめた。引用文の刊記は最小限とし、論文や作品の引用はあえて原文に徴しての校正はしなかった。また前半部は拙論「砂の器」考——社会派推理小説のレトリック、もしくは新聞小説、その読み方の作法について——松本清張研究（二〇一五・三）と一部重複するところがあることを申し添えておきたい。

研究発表 「小説に描かれた考古学世界の理想と 現実―松本清張と以後の小説―」 発表者・絹島 歩（奈良県立橿原考古学研究所主任研究員）

松本清張が描いた考古学世界の中で、まず「人物」は大学の教員、学生もいますけど、基本的に大学関係者が中心であります。次に、「時代」です。時代は1950年代から1960年代は、縄文、弥生時代が中心に見えます。1970年代以降には、ササン朝ペルシャとか中国とか、西アジアのことを描いている「火の路」とか、そういった海外考古学が多く登場するようになります。そういった意味で年代で変化が見られるのです。



次に「遺跡」です。九州や関東や北陸など、全国各地の多様な遺跡が登場しております。縄文時代の遺跡もあれば、弥生時代の遺跡もある。初期の「距離の女囚」という作品では奈良県の唐古遺跡や岩室遺跡、中曾司遺跡のような遺跡が描かれています。

「遺物」に関しては、縄文土器、弥生土器などが登場することが多い。例えば、弥生土器は、すでに大津忠彦さんが言われていることですが、「途上」という小説では「O川式土器」という土器が出てくる。これは、実際の「遠賀川式土器」を省略してアルファベットで書かれているわけです。また「万葉翡翠」では、縄文土器の加曾利E式という名称が出てくる。このように、実際の考古学で使われている型式の名称が小説の中に登場するというのが特徴的だと思います。「火神被殺」ではクリス型銅剣(銅戈)とか、「鵬外の婢」では櫛描紋を持つ弥生土器とか、同じものが描かれている小説がだいたい同じ年代に出てくるというのも、一つ興味深い点だと思います。

「内海の輪」を考古学的視点で読む

「内海の輪」は、考古学者を主人公とする倒叙ミステリーです。主人公が長年の愛人を殺害するわけです。その犯行発覚に、発掘調査であったり考古学的内容が大きく関わっているのです。

「内海の輪」に登場する考古学者は江村宗三と言います。年齢は40代前半ごろの人物。当初は大学の助教として登場して、犯行のちに教授に昇格します。小説内では、「気鋭な新進学徒として学界からますます注目された」存在であり、専門は

「弥生式時代の研究」であって、「高地性集落研究」に興味を持った人物として描かれています。

「内海の輪」に登場する遺跡は、複数の遺跡が登場します。まず岡山の遺跡「備中浜尾新田の住居址」というのが出てきます。これについては、松本清張が複数のモチーフから創作したものではないかと考えます。次に、岡山の遺跡で「牛窓周辺の貝塚」です。縄文時代の遺跡というのは牛窓の島に実際に存在しています。

この物語の中心となる遺跡は、「兵庫県西宮市岩倉山西北方の山麓の遺跡(蓬萊峽)」です。蓬萊峽は宝塚市と西宮市の境に近いところ。小説の中では、船坂という集落があり、そこに大学の発掘調査の基地があつて、そこから蓬萊峽に宗三が案内される。その船坂はこの西側にありまして、歩くとだいたい40分くらいです。けっこう時間がかかる、そういった距離感の中に小説では描かれている。この蓬萊峽で愛人美奈子を殺害し、そこに遺体を投げ捨てる。その後大学の発掘調査によって弥生時代の様々な物が出土します。しかし、この蓬萊峽に現在、存在が確認された遺跡ありません。

「六甲山の高地性遺跡」として、五箇山、会下山、城山、保久良、叔母野山という遺跡の名称が挙げられています。戦前から知られていた保久良遺跡を除いて、戦後から小説執筆時点1968年までに確認された遺跡です。最新の情報をもって取り上げられているわけです。

次に「内海の輪」に登場する遺物です。複数の特徴的な遺物が登場します。

まず「銅剣」です。小説内では、「クリス型銅剣」という銅剣と「細形銅剣」という銅剣が登場します。「クリス型銅剣」というのは「銅戈」のかつての名称です。連載当時、1968年でも「クリス型銅剣」という名称は使われていたが、基本的にはもう「銅戈」になつていました。そういうこともあつて、本文中でも同じものを指しているんですけど、「一種のクリス型銅剣」↓「銅戈」↓「クリス型銅剣(銅戈)」というように記述に変化が見られます。もう一つの、「細形銅剣」は蓬萊峽で愛人を殺害した後、発掘調査によつて、弥生時代の中期後半の櫛目紋土器といつしよに見つかるという記述がある。本文中には、細形銅剣とは、「弥生時代前期末から中期」出土はほとんど九州「中期の細形銅剣が六甲山麓で発見されたのは初めて」という記述があります。それに合わせるように、小説連載の翌年、淡路島の南あわじ市の古津路で細形銅剣が1点見つかりました。慧眼であつたと思えます。

次に、「弥生土器(櫛目式で、いわゆる畿内第三様式に属している)」と、「石器(石鎌・石錐)が登場しています。次が「ガラス剣」です。これは事件解決の発端となるアイテム

なのですが、執筆時には日本列島で2例しかないものでした。京都の比丘屋敷敷墳墓と福岡の二塚遺跡出土のもの。執筆後に、京都の大風呂南1号墓と高根の西谷2号墓から出土し、今、合計4例が存在しています。このように日本列島でかなり出土数の少ないものが蓬萊峽の遺跡から出土するという点で、この遺跡が非常に重要な遺跡であることを強調して描かれているのです。

最後は「多紐細文鏡」です。紐が複数あつて、細かな文様が付いている鏡です。現在は日本列島で12例出土しておりまして、北部九州に分布が集中しています。これも非常に出土例が少ない。この鏡が蓬萊峽に出土するという小説の記述は、蓬萊峽から出た新規発見の遺跡の重要性、特異性を示すモチーフとして選択されたものだと考えられます。近畿地域では、大阪府柏原市大泉遺跡や奈良県御所市の名柄で出土し、執筆以前から知られています。

この「多紐細文鏡」は、絶筆の「神々の乱心」でも、物語のキーとなるアイテムとして登場しております。1968年の「内海の輪」から20数年たつて、再び登場させているわけです。松本清張が「内海の輪」以降も「多紐細文鏡」に非常な関心を持っていたことが分かります。

考古学と大衆文化としての小説

松本清張は、非常に専門的で多彩な時代の遺跡・遺物などの考古学世界を、小説の中に取り入れていきます。1950年代から60年代にかけては国内の多様な遺跡や遺物が登場し、1970年代以降は海外の考古学世界が多く登場します。

松本清張以降の作品における考古学世界は、考古学上の重大発見で一般にも話題となり認知度の高い遺跡や遺物を中心に描くことが多い。これは、考古学世界を取り入れる際に、読者の認知度の高いものを作品のエッセンスとして選択した結果ではないかと思えます。

「内海の輪」は、ガラス剣や多紐細文鏡など、清張以後の小説に描かれていない遺物を当時最新の研究成果を忠実に取り入れながら扱っている。一方で、主人公の職業(大学教授)や専攻、年齢などは清張以後の小説とも共通点があり、現在の考古学世界を描いた小説ともつながる点でもあります。そういう点では「内海の輪」は、考古学世界を描いた作品としては金字塔であるような作品であつたと考えます。

小説に描かれた考古学世界は、犯罪の加害者・被害者などネガティブに描かれることもあり、それが問題の本質ではなく、考古学世界が大衆文化の中で現状どのような位置を占めているかの羅針盤です。考古学側には、未来を見つめながら成果を発信していく必要があると考えます。

遺された指紋——松本清張と台湾ミステリー小説

会場：松本清張記念館

期間：2022年7月29日(金)～10月23日(日)

※国立台湾文学館でも同時開催

2022年7月29日(金)～10月30日(日)

近年、華文ミステリーが話題となっています。中でも新しい台湾作家の活躍は、日本をはじめ海外からも注目され始めています。

台湾で読まれるミステリー作品の中には、日本の小説も多く含まれています。日本で人気の小説は、いち早く台湾の書店にも並び、多くの読者が新作を心待ちにしています。このような日本ミステリー人気のきっかけのひとつが、80年代の松本清張ブームでした。

「台湾文学」というアイデンティティを獲得するまで、多くの苦難を乗り越えてきた台湾は、その過程において日本の文学を受容しました。その影響関係や、清張作品の受容、そこから進化を遂げた現在の台湾ミステリー、日本ミステリーの状況についてご紹介します。



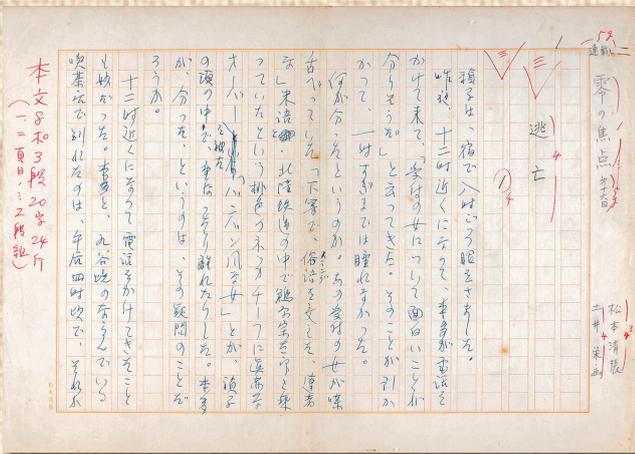
国立台湾文学館



「民俗台湾」1巻1号
国立台湾文学館所蔵
1941年



林佛兒『島嶼謀殺案』1984
林白出版社



「零の焦点」原稿



『焦点』1977年 林白出版社
台湾で70年代に出版された
松本清張『ゼロの焦点』

構成

1. 目撃証人の告白

日本とも関りの深い台湾文学の歴史を知っていますか？——あなたは今「台湾文学」の目撃者となるのです。

2. 現場の如何なる痕跡も見逃さない

メイド・イン・台湾の推理小説がどのようにして生まれたか——時代を遡って現場を追跡せよ！

3. 断崖の向こうから来た推理

海を渡って台湾で起こった清張ブーム。台湾ミステリーにも大きな影響を与えたのをご存知ですか？

4. 終わりのなき探究

最新まで「真実探究」の歩みを止めなかった作家・松本清張の、生い立ちから創作活動までご覧にいきましょう。

5. 遺された指紋は誰のもの？

現在、台湾と日本のミステリー界は多彩で豊かな作品にあふれています。誰が何故、何のために？——答えは本展で。

6. ミステリーに隠された真相

国立台湾文学館(台南市)・北九州市立松本清張記念館の知られざる活動をご紹介します。

関連イベント

- ◆「遺された指紋－松本清張と台湾ミステリー小説」
in 台湾文化センター
会場：台北駐日経済文化代表処台湾文化センター
(東京都港区虎ノ門1丁目1-12虎ノ門ビル2階)
期間：2022年7月29日(金)～8月19日(金)



コラボ企画

企画展記念上映

「葬られた戦後史が甦る
清張作品と台湾ミステリー」

◆上映作品：

- 『返校 言葉が消えた日』
- 『ゼロの焦点』

会場：小倉昭和館

(北九州市小倉北区魚町4丁目2-9)

期間：2022年9月3日(土)～16日(金)



©2009「ゼロの焦点」製作委員会



©1 PRODUCTION FILM CO. ALL RIGHTS RESERVED.



老舗映画館「小倉昭和館」は、8月10日に発生した旦過市場の火災により全焼し、映画の上映はできなくなりましたが、「小倉昭和館」への感謝と応援の思いを込めて、記事を掲載させていただきました。



- ◆辻利茶舗 × 「松本清張と台湾ミステリー小説」
SEICHO café の期間限定メニュー
「ふわふわの焦点」台湾カステラと台湾茶のセットメニュー

「ふわあっふぁ」と「しゅわっしゅあ」の魔性の食感
小倉北区京町のスイーツ店「Fralito-Fwalito (ふらりとふわりと)」
の特製メレンゲが織りなす「ふわあっふぁ」「しゅわっしゅあ」食感
の台湾カステラと辻利茶舗自慢の台湾茶をセットで楽しめる期間
限定メニューです。この機会に、ぜひお試しください。
※辻利茶舗では、東方美人・凍頂烏龍茶などの台湾茶もとり揃えています。

SEICHO café 新コラボメニュー



- ・台湾カステラ × 東方美人茶 1,200 円
- ・台湾カステラ × 凍頂烏龍茶 900 円

SEICHO café 新メニュー



いちごスムージー 560 円

見た目の可愛さ
だけでなく、カ
ロリー低めで、
ビタミン C や
ペクチンなど美
容効果を期待で
きるさまざまな
成分が含まれて
います。夏にう
れしい逸品！



あずきと抹茶のスムージー 660 円

あずきと抹茶を
使った飲みやす
く満足度のある
スムージー！暑
い夏にぴったり
な逸品！



詳しくはインス
タグラムをチェ
ックしてください。



松本清張記念館 企画展示室横にカフェがあります

第24回 松本清張研究奨励事業入選企画決定

松本清張研究奨励事業は24回目を迎えました。選考委員会による審査の結果、2件の研究企画が入選しました。

企画名 切り捨てられた明治の尊攘派—
『昭和史発掘』精神による「維新史発掘」

入選者 遠矢浩規（早稲田大学政治経済学術院教授）

企画名 日本語・中国語・英語圏における
『砂の器』の受容と展開

入選者 (代表) 田中ゆかり（日本大学教授）

第25回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)

※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。
ジャンルは問いません。ただし、未発表に限り、個人又は団体も可。

内容 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。

募集期限令和5年3月31日

※詳しくは、ホームページをご覧ください。
記念館までお問い合わせください。



友の会 活動報告

● 清張サロン

第3回清張サロン（北九州森鷗外記念会との連携事業）

日時：令和4年6月25日（土）14:00～15:30

会場：松本清張記念館企画展示室（29名参加）

テーマ：「松本清張から広がる読書（1）－森鷗外」

講師：加島 巧氏（松本清張記念館友の会・会長）

令和3年度第3回目の清張サロンは、加島巧・松本清張記念館友の会会長を講師に「松本清張から広がる読書（1）－森鷗外」と題し、『文芸推理小説選集1 森鷗外・松本清張集』の松本清張が記した「解説にかえて（鷗外の暗示）」などの資料を基に、お話いただきました。

「推理小説は、人間が描かれてないと、文学に縁遠いものになる。」という松本清張の意見などを詳細かつ奥深く、解説いただきました。また、津和野での加島会長と松本清張との遭遇話など、とても興味深い話もたくさんあり、会員の皆さんも時間の経つのも忘れ、聞き入っていました。講演後も、加島会長に個別に質問に訪れる方もいっしょに、没後30年の松本清張、没後100年の森鷗外の二人の偉大な作家に思いを馳せる、良い機会になったのではないのでしょうか。



松本清張記念館友の会・会長 加島 巧氏

● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、
松本清張記念館友の会事務局まで TEL.093-582-2761

松本清張没後30年となる今年、2022年 —遂に松本清張Tシャツが登場！

唯一無二のオリジナルデザインTシャツを製造・販売するハードコアチョコレート（コアチョコ）が手掛ける文豪レジェンドシリーズに松本清張Tシャツが登場！ブラックカラーとスマイカラーの2タイプのデザインを同時発売。

定価4,400円（税込）と少々高めですが、松本清張の世界観がぎゅっと詰まった価値ある1枚です！



詳しくはハードコアチョコレートのホームページをご覧ください。



作家の精悍な肖像と推理小説をイメージさせるロゴをフロントに配し、バックを直筆原稿の山と作品タイトルで覆ったブラックカラー。昭和史最大の謎、「下山事件」の現場を取材する貴重な姿がプリントされたスマイカラー。どちらも松本清張の重厚で圧倒的な作家性を象徴するデザインとなっている。（※ハードコアチョコレート公式HPより抜粋）

●編集後記●

毎年8月に開館記念講演会を実施しています。今年は8月21日に生物学者の福岡伸一氏を講師にお迎えし「生命を捉えなおす～動的平衡の視点から～」をテーマに講演をしていただきます。内容は次回の館報でお届けします。

また、今回の館報でもお知らせしていますが、清張没後30年を記念して、国立台湾文学館との共同企画展「遺された指紋—松本清張と台湾ミステリー小説」を開催しています。どうぞ記念館に足をお運びいただき、清張と台湾ミステリーの魅力にふれてみてください。（T.O）

◆記念館館長あいさつ◆

館長 古賀 厚志

4月に松本清張記念館の館長を拝命いたしました古賀厚志と申します。このような素晴らしい記念館で、研究活動への支援や清張先生の魅力発信などの一翼を担う機会を頂戴し、望外の喜びと、大変身の引き締まる思いでございます。

没後30年を迎えた今、次世代への効果的な魅力発信が不可欠だと考えています。とりわけ、子どもたちに対しては、「度重なる逆境にあっても人並み以上の努力や学びによってたくましく人生を切り開いてきたこと」や「絶えず弱い立場の人たちの気持ちに寄り添っておられたこと」など、清張先生の生き様 や考え方、人となりに関しても、工夫によりうまく伝えていくことが必要だと考えています。

微力ながら一生懸命頑張っております。どうぞよろしく願い申し上げます。

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作 有限会社シーズ



イラスト：山藤 章二

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 毎週月曜日（休日の場合は翌日）、年末年始（12/29～1/3）館内整理日
- 観覧料 一般/600円（480円） 中・高生/360円（280円） 小学生/240円（190円）（ ）は30人以上の団体
- アクセス JR：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からバスをご利用いただくと便利です（小倉城・松本清張記念館前下車） 車：北九州市都市高速 大手町ランプより5分

